

## 発達障害の疑いのある子どもへの保育 2

### ～ 注意欠陥多動性障害を中心に ～

## Nurture to the child suspected of Developmental Disability

### ～Focusing on Attention Deficit/Hyperactivity Disorder～

森定 美也子

Miyako Morisada

#### 要 約

「発達障害」とは、自閉症スペクトラム障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの様々な脳機能の障害の総称である。本論では、発達障害のうち、特に注意欠陥多動性障害(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder: AD/HD)に焦点を当てて、乳幼児期の発達過程や保育のポイントについて論じた。AD/HD の子どもは、自己コントロールが苦手であるため、家庭におけるしつけの難しさや、集団行動に適応しにくい特徴が小さい頃から見られる。親は、厳しくしかることが多いが、子どもは、しかられることによって、自信をなくし、ますます落ち着かなくなる、うつになるなどの二次障害を起こしてしまうこともある。このような悪循環から、保護者自身が自信をなくし、障害受容が滞ることもある。悪循環に陥らないようにするためには、褒めることが大切である。褒められた実感を通して、自信を取り戻していく。褒めることを基盤とした保育士との関係性の中で、子どもの自尊心が培われ、行動をコントロールする力の成長につながっていくのである。

#### はじめに

本稿では、「発達障害」と呼ばれる、自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder:ASD )、学習障害(Learning Disability:LD)、注意欠陥多動性障害(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder:AD/HD)などの様々な脳機能の障害のうち、特に対応が難しく、二次障害に陥りやすい注意欠陥多動性障害(以下AD/HD)に焦点を当てて、乳幼児期の集団生活における特徴や、保育のポイントについて論じたい。

#### 注意欠陥多動性障害(AD/HD) とは

AD/HD は、衝動性の高いタイプと、注意の振り向け方が上手ではない、注意欠陥タイプ、また、その両方を伴うタイプがあり、それに加えて学習障害が加わるケースもある。自己コントロールが苦手であるため、家庭におけるしつけの難しさや、集団行動に適応しにくい特徴が小さい頃から見られ、3 歳児健診の場で気づかれることも多い。その反面、注意欠陥タイ

プは、大人になっても自らの特性に気づかず、社会に出てから困難に直面することもある。

#### (1)AD/HD の認知的な特徴

アメリカにおける AD/HD 児の研究の権威である Barkley (1995)によれば、AD/HD は、① ワーキングメモリーの弱さ：何かしようとする時に情報を記憶に留め置く力が弱い、② 言葉で行動をコントロールする力が弱い、③ 感情や衝動をコントロールする力が弱い、④ 次の行動を目標に沿って組み立てていく力が弱いという4つの実行機能、すなわち自己コントロールをする機能がうまく働いていないと指摘している。

特に、言葉と行動・衝動のコントロールの関係において、Barkley (1995)は、小さい子どもが衝動を抑える手段として独り言を言う例を挙げて、言語能力と衝動性に関連があると述べている。日常、私たちは心の中で自分と会話しながら思考し、行動している。こうした「自分への語りかけ」、すなわち「内言」が行動をコントロールする力になっているのである。この「内言」の能力が弱いと、行動が抑制しにくくなり、問題解決に向

けての自己問答や反省・行動の振り返りができにくくなる。Barkley (1995)は、AD/HD は特にこの「内言」の発達に困難があると指摘している。AD/HD の子どもは、内言によって行動をコントロールすることが未熟であるため、AD/HD ではない子どもより、衝動性が助長される。そのために衝動の抑制、自己コントロール、行動の指針となる計画や目標を立てる能力の発達が阻害されていくのである。

以下に保育場面でよくみられる、ASD 児の特徴についてまとめてみたい。

#### ① 問題行動の修正のむつかしさ

自己コントロールがうまくいかず、問題行動を修正できないため、問題行動を何度注意しても、繰り返してしまう。

#### ② 声の大きさの調節ができない

自己コントロールの未熟さから、声の大きさの調整ができず、大きな声で話すことが多い。

#### ③ 聞いたことを覚えておく力が弱い

聴覚的な情報はキャッチしにくく、覚えておくことも難しい。例えば、「体操服に着替えて、はちまきを持って、園庭に行きましょう」という指示に対して、最後の「園庭に行きましょう」だけを聞き取り、皆が体操服に着替える中、一人園庭へ飛び出してしまふこともある。

#### ④ 不器用さがある

学習障害との合併が見られるケースでは、手先や運動能力の不器用さが見られる。手先が不器用で、字を書くのが下手、姿勢が悪い、バランスが悪い、歩き方・走り方がぎこちないなど、学習障害や発達性協調運動障害などと重なっているケースも多い。

### (2) AD/HD 児への対応

上記のような特徴を持つAD/HD の子どもに対して、次のような対応が望まれる。

#### ① 先の見通しを「視覚的手がかり」を用いて知らせる

指示を聞き取って理解することに困難を抱えるため、視覚的に伝える方法が有効である。登園時に1日のスケジュールを伝えたり、次の活動を写真や絵カードを用いた「視覚的手

がかり」を用いて先の見通しを知らせるとよい。

#### ② 対人関係について具体的に教えていく

自分がしたいと思うことに、一直線に向かってしまい、周りを顧みないため、トラブルになることが多い。保育者が間に立って、「遊びに入るときは『入れて』といういいよ」など、遊びのルールを教えることが必要である。特に順番が守れないことによるトラブルが多いため、「順番を守ること」についての指導が大切である。

#### ③ 褒めることの大切さ

褒めて自分に自信をつけていくことが、自己コントロールを高めていくうえで重要である。視線を合わせ、感情をこめて、褒められる行動が見られたらすぐに褒めることが大切である。

#### ④ 園全体で支援する

どの発達障害においても、園全体の支援は大切であるが、特にAD/HD の子どもにおいては、その多動性や衝動性を受け止める上で、園の職員全員のチームワークが試される。子どもの状態や発達の課題を各職員が把握するため、担任がしっかりと記録をとり、その時の課題について、打ち合わせの場で他の職員と情報を共有することが大切である。

## 保育園におけるAD/HD 児の事例

問題行動が多いAD/HD の子どもASD の子どもでもあるが、保育士の理解ある対応によって、パニックや二次障害などを起こさずに、成長していくことが可能である。

ここで保育場面でのAD/HD 児の例を通して、具体的な現状の理解や対応のポイントについて考えていきたい。以下のケースは、プライバシー保護の観点から、よくあるケースをいくつか組合せて構成した事例である。

発達段階ごとの成長の様子や対応のポイントについて、2歳は1年、以後半年ごとにその成長を追っていく。

< AD/HD の疑いのあるC君 >

C君は2歳から保育園に通園している。

### 【2歳から3歳の時期】

< 園での生活の様子 >

おままごとで使う食品のおもちゃなど、何でも口の中に入れて、イライラしているときは物を投げたり、他児を押したり、叩

いたりするなど、自己コントロールが難しい姿が目立つ。座っているときも、視線があちこちに動き、興味があるものが視界に入ると、すぐそちらへ行ってしまふ。音楽に合わせてホールで走る場面では、興奮して悪気なく他児にぶつかってしまうため、保育士が伴走して、ぶつかりそうになると抱きとめる。保育士は、C君がどのように行動すればよかったかを分かりやすく説明しつつ、注意するようにしている。

〈 言葉の発達 〉

早口であり、発音が不明瞭である。声のコントロールができず、いつも大きな声で話す。おうむ返しが見られ、言葉の数が増えない。「三匹の子豚」の人形劇のお話の流れが分からず、内容よりもピアノの音に注意が行く。

〈 保護者の様子 〉

C君をかわいがってはいるが、しつかに困っている様子で、叩いて叱ることが多い。

【3歳から3歳半の時期】

〈 園での生活の様子 〉

おもちゃを投げたり、他児を叩いたりする姿は引き続き見られ、注意されると余計にイライラした様子を見せる。お昼寝の時間もテンションが高く、寝ることができない。食事では、お茶を飲むペースに合わせてコップを傾けることができず、よくこぼしてしまう。手と目の協応動作が苦手である。集中すると、積木を上手に積むことができる。

〈 言葉の発達 〉

言葉が不明瞭であるため、自分の意図が保育士や友達に伝わらず、イライラしている。言葉は増えてきたが、意味がずれている。ホールで音楽に合わせて走る時、C君の方から「当たらないように気をつけて走るね」と、普段注意されていることを保育士に伝えて走るようになる。食事中に大声を出しても、保育士の声かけで止めることができる。「待つて」という指示が分かるようになり、保育士とのやり取りがスムーズになった。

〈 保護者の動き 〉

3歳児健診で、経過観察となるが、母は仕事が忙しいため、定期的に保健所へ相談に行くことができない。

【3歳半から4歳の時期】

〈 園での生活の様子 〉

お茶は少し上手に飲めるようになったが、手と目の協応動作がうまくいかず、視線をご飯に向けずにスプーンですくおうとするため、食事中よくこぼす。右手と左手を両方同時に使うことができないため、キャップのふたを閉めることができない。教室の中で奇声を上げながらぐるぐる走り回ることが多い。トイレに行くことができるようになる。

〈 言葉の発達 〉

言葉の理解力は伸びてきたが、発音が不明瞭なため、C君が話していることの半分は聞き取ることが難しい。

〈 遊びの様子 〉

「入れて」も言わず、突然、遊んでいる友達の中に入っていくため、友達とうまく関われず、泣いてしまうことが多い。一度泣き出すとなかなかおさまらない。保育士は「『入れて』と言って入ろうね」とその都度アドバイスしている。三輪車がこげるようになったが、前を見ておらず、力の加減をせずにこぐため暴走気味で、他児にぶつかりそうになり、目が離せない。

〈 保護者の様子 〉

保健所から、虫歯の健診もかねて相談に来てくれるように連絡を取ろうとしているが、母が仕事でおらず、連絡が取れない。

【4歳から4歳半の時期】

〈 園での生活の様子 〉

食事の時、嫌いなものはお皿ごと投げてしまう。ご飯がこぼれて床に落ちてしまうと、そちらに注意が行き、落ちたご飯を足で踏みつぶして遊んでしまうため、こぼしたものは保育士がすぐにふき取り、食事以外に注意が向かないように環境を整えている。自分が飲むペースでお椀を傾けることができず、味噌汁をこぼすことが多い。汚れた服を保育士に着替えさせてもらう時、裸になるとテンションが上がり、園庭に飛び出して駆け回る。おもらしをすることが増えてきた。

〈 言葉の発達 〉

発音が不明瞭なところはあるが、言葉でのやり取りが十分

成立するようになる。

〈 遊びの様子 〉

椅子取りゲームのルールを理解し、座ることができなくても我慢をしている。ブロックの凹凸が繋がられない。保育士がほめながら関わると、一つ繋げることができる。ハサミを使うことができない。絵はめちやくちの線を描き、指先をうまく使ってクレヨンをコントロールすることができない。

【4歳半から5歳の時期】

〈 園での生活の様子 〉

食事の時の保育士が「こぼさないようにお椀を持って」、「前に詰めて座りましょう」と丁寧にアドバイスし、アドバイスを守ることができたら褒めるという指導を繰り返す、少しずつ落ち着いて食事ができるようになってきた。お昼寝は興奮して寝られないため、押し入れの下の部分に布団を敷き、三方壁に囲まれた空間で、保育士が根気強く背中をとんとんとしてやっとな寝られるようになった。雪が降ったり、園庭に猫が来たりすると、制作中でもそちらに気がとられて飛び出して行ってしまふ。母に叱られて登園すると、イライラして友達にあたり、おもしろいをしてしまうことが多く、落ち着くまでに時間がかかる。

〈 遊びの様子 〉

左利きであるが、ハサミを持ち換えて切ることができるようになった。遊んでいるときに他児を押ししてしまうので、クラスの子は距離を置いて接している。

【5歳から5歳半の時期】

〈 園での生活の様子 〉

衝動的に他児を叩いたり、物を投げたりする行動は続いている。不安になると保育士にスキンシップを求め、気持ちを落ち着けている。5歳児の制作などの活動にはなかなかついていけず、保育士に手伝ってもらって自分ができるところまで頑張った後に、園庭に出ていく。食事でお箸を使うことができるようになった。プールの時は興奮して、他児の上に乗る行動が見られる。保育士のアドバイスで、「ごめんね」ということができるようになった。褒めるためにシールを導入する。運動会の練習では他児とのトラブルが多い。

〈 言葉の発達 〉

「らくだ」が「だくだ」になるなどラ行が不明瞭である。

〈 保護者の動き 〉

就学の事前相談につなげる目的で、園長先生が母と面談する。母は育児に困ってはいるものの、仕事の忙しさと、C君の問題に直面する辛さもあり、事前相談に行こうという気持ちになれない。

【5歳半から6歳の時期】

〈 保護者の動き 〉

C君は就学時健診で落ち着いていられず、就学について個別相談となる。母親は就学のことで不安を抱え、C君の多動な面に対して、厳しく接し、「いい子にしてください」というプレッシャーを常にかけてしまっている。

〈 園での生活の様子 〉

母の不安を受けて、C君も不安定になり、おもしろいが増えた。そのことが余計に母親の不安を募らせてしまい、C君に厳しく注意するという悪循環が生じてしまう。

C君がこれまで保育士と共に築いてきた「自分への自信」が崩れてしまい、注意力やテンションの高さをコントロールすることができなくなった。食事中に園庭を駆け回ったり、保育士に抱っこなどのスキンシップを求めるなど、幼い状態に退行する姿が見られるようになった。卒園式もじっと座っていることができなかった。

## 事例についての考察

(1) 保護者の障害受容の難しさ

発達障害の場合、2～3才までの間自分の子どもは健常児であると思っているため、保護者の障害受容が難しく、時間もかかる。特に、AD/HDの子どもは、「しつけが出来ていない」と見られることが多い。親は、「何とか子どもに言うことをきかせよう」と厳しくしかる。しかし、C君の事例にみられるように、しかられることによって、自信をなくしてますます落ち着かなくなったり、うつになったりなどの二次障害を起してしまうこともある。このような悪循環から、保護者自身が自信をなくし、心が傷ついてしまっているケースも多い。保護者自身がわが子に対する無力感や不安、怒りの感情を抱え、次第に自らの育児に対する自信を失っていく。このような困難さから、C君



の事例にみられるように、障害の可能性を指摘されても、その問題に直面する心のゆとりが持たず、障害受容に時間がかかることもある。保護者の不安や怒りは、AD/HDの子どもに大きな影響を与えるため、C君の事例のように、園で積み上げたC君の「自尊心」が崩れてしまい、二次障害ともいえる退行した状態に落ちいってしまう。何年もかけて積み上げてきたものが崩れたまま卒園してしまうのは、大変残念なことではあるが、母の障害受容が進み、C君が今後信頼できる先生と出会ったときに、園で蓄積された自尊心が再び生きてくるであろう。

## (2) 言語と行動のコントロールとの関係

AD/HDの子どもの言葉は、「多弁ではあるが会話が成り立ちにくい」という特徴がある。AD/HDの子どもは、内言の発達が未熟であるため、心の中で行われるべき「自分への語りかけ」が、心の中では収まりきらず、言葉となって外に発せられてしまう。そのため、一見多弁ではあるが、その内容は自分の心の中での言葉のやり取りを反映した形となり、他者の発言内容を理解した上でのやり取りにはなりにくい。

このような特徴を踏まえ、うたえで言語能力を伸ばしていくには、AD/HDの子どもの気持ちの揺れや変化を保育士が読み取り、保育士が言語化するプロセスを経て、子どもに伝え返すという日々の取り組みが重要である。

例えば、保育士が問題行動に対して、頭ごなしに叱るのではなく、「こうになってしまうのは、イライラする気持ちがあるからかな」と、AD/HDの子どもの気持ちの背景を言語化していくことで、子どもも、「イライラすることがあるんだよ。」と自分の気持ちを言語できるようになる。

C君の事例においては、3歳から3歳半の時期のエピソードとして、ホールで音楽に合わせて走る時、「当たらないように気をつけて走るね」と、普段注意されていることを保育士に伝えて走るようになる。これは、保育士の日々の声掛けによって、自分の行動を言葉にして客観的に捉える、メタ認知の力がついたことを示している。ちょうどこの時期から、食事中に大声を出しても、保育士の声かけで止めることができたり、待てるようになっていく。内言を保育士の声掛けで補い、どのような行動をすればよいイメージができるようになったということで、この力がついてくると、保育士の指導も入りやすくなる。

## (3) 行動のコントロールについて

AD/HDの子どもは、小さい頃から、衝動や行動、感情の

コントロールが上手いかわからないため、父や母に叱られることが多い。しかし、行動を上手くコントロールすることができないので、すぐにまた同じことで叱られてしまう。しかる方も「何度言っても分からない」というジレンマを感じるようになる。「しかり方が甘いのでは」という思いから、かなりひどい体罰を加えてしまう保護者もあり、それがエスカレートして、虐待にまで発展してしまうケースもある。

抑制機能がうまく働かないため、周囲から評価されず、しかられ続けたことは、AD/HDの子どもの心の中で、「怒り」の形を取り、長い間蓄積されている。この根底にある怒りが、攻撃性や衝動性のコントロール不能を助長していく。保育士は、このような怒りを蓄積させないように、態度や言葉で行き過ぎた衝動を制して、怒りを言語化し、落ち着かせていくことが必要となる。

## (4) 自尊心の回復

何度も何度もしかられてしまうAD/HDの子どもの自尊心は、小さい頃からズタズタになってしまっている。それは二次的な情緒障害の始まりである。叱られることで、自信を無くし、イライラしてまたトラブルを起こし、さらに叱られる…という悪循環の中で、無気力になる、反動的になる、人間不信に陥る、うつ状態になるなどの二次的な情緒障害に陥るのである。この悪循環に陥らないようにするためには、ほめることが大切である。

ただ、問題行動が多いAD/HDの子どもをほめることは、存外難しい。褒めるスキルを学ぶためのペアレント・トレーニングが必要なほどである。園においても、「課題に取り組み始めたらすぐ褒める」、「3分でもちゃんと座っていたら褒める」など、少しでもできたところがあれば、積極的にほめていく。C君の事例のように、「ごほうびシール」を導入して褒めるのも有効な方法である。AD/HDの子どもは、褒められたことも忘れてしまうことが多いため、「以前こんなに頑張っていたね」と、獲得したシールを視覚的に見せながら指導を行うことが有効である。褒められた実感を通して、AD/HDの子どもは自信を取り戻していく。それが、行動をコントロールする力の成長につながっていくのである。

## おわりに

発達障害のある子どもが成長していくには、様々な困難の山に直面していかなければならない。AD/HDの子どもが様々な

困難を乗り越えていく時に、保育士との関係性の中で培われた自尊心や、自分の気持ちを言葉にする能力が役立っていくことを切に願うものである。

<引用・参考文献>

Barkley, Russell A. 1995 Taking charge of ADHD : the complete, authoritative guide for parents. New York : Guilford Press. バークレー先生の ADHD のすべて / ラッセル A バークレー著 ; 海輪由香子訳 ヴォイス, 2000.6

Lougy, Richard A., DeRuvo, Silvia L., Rosenthal, David 2009 The school counselor's guide to ADHD : what to know and do to help your students. Corwin Press. 「ADHD 臨床 : 学校における : 現場で援助する実務家のための工夫」R.A. ルージー, S.L. デルヴォ, D. ローゼンタール著 ; 桐田弘江, 石川元訳 誠信書房, 2012.9

西田清 2004 AD/HD・LD の発達と保育・教育 クリエイツか  
もがわ出版